

## 「体験を通して」

角田 浩輔

一

それでは宜しくお願いいたします。最初に三皈依文をご一緒に唱和いたしたいと思います。お願いいたします。

人身受け難し、いまずでに受く。仏法聞き難し、いまずでに聞く。この身今生において度せずんば、さらにいずれの生においてかこの身を度せん。大衆もろともに、至心に三宝に皈依し奉るべし。

自ら仏に皈依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大道を体解して、無上意を發さん。自ら法に皈依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、深く経藏に入りて、智慧海のごと

くならん。

自ら僧に皈依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大衆を統理して、一切無碍ならん。無上甚深微妙の法は、百千万劫にも遭遇うこと難し。我いま見聞し受持することを得たり。願わくは如来の真実義を解したてまつらん。

改めまして本日は宜しくお願いいたします。一時間という時間を頂戴しております。昨年お話しさせていただいた時に、かなり、三十分以上超過いたしました、(貝沼) 佳津代さんから「今回はちゃんと時間通りに終われ」というふうに釘を刺されておりますので、そのようになつたら嬉しいなあと思っております。

今回も肩書は「三一問答の会 發起人」ということで、今日はここに座らせていただいております。現在、廣瀬惺先生をお招きして、三一問答の会ということを数年前から続けております。じゃあなんで三問答を聞きたいのかということ申し上げますと、私においては、真宗を学ぶ道程を明らかにしたいんだということがあったわけです。私はお坊さんになりまして、もう今年で十年目ですけれども、この十年間で感じたことはですね、自分自身が真宗の学び

の道程が明らかにならなくて、非常に苦勞したという体験がございます。それこそ念仏もうせ、念仏もうせとかです、ね、なんなんだぶつ、なんなんだぶつと、とにかく念仏とかです、ね、あるいは仏法は毛穴から入っていくんだからとにかく座つとればいいんだとか、そのようにいわれてもです、ね、分からんわけですよ。困っちゃうわけです、ね。

私の場合です、ね、泣く泣くこの十年間、色んな先生方、諸先輩方の本を、泣きながら講義録を読ませていただいたということがありました。大谷派だけに限っても、私はそれしか知りませんでした。色んな先生方が、本当にすごい先生方がおられるんですね。私は学び始めた時、驚きました。こんな広く深くものを考えている先生がこんなにいるんだ。

こういう方々がいたんだということです、ね。それこそ例えば安田理深先生を挙げれば、もう普通に義務教育の教科書に名前が載ってても全然おかしくないような方だと私は思っております。

廣瀬惺先生は、ああいう方々の時代を「第二の真宗再興の時代」だったとおっしゃっております。私自身も、体験を踏まえて申し上げれば、やはり真宗再興の「真夏の時代」があったと思います。ですが

過ぎ去ったんですね。もう真夏の時代は終わったと思っております。夏ですから雑草の如く、色んなところからニヨキニヨキニヨキ色んな聞法者が生まれて、そして呼んでもいないのに京都にワッと有名な先生方が集まってくる。しかし、そういう時代は過ぎた。夏が終わればどうなるか。秋の時代、冬の時代が来ます。夏がいいというわけじゃないですね。この秋の時代、冬の時代においてです、色んな先生方が遺してくださった教えの言葉をまとめ、まとめるといいます、いいよここから真宗の学びの道程を明らかにし、さらに言えば、これから百年、二百年かけて、それを相続し、ともに真宗の学びの道程をはっきりさせるようなことができたらしいなあと思っています。

これは何も俯瞰してものを言っているわけじゃないです。その第三の真宗再興の時に向かってですね、その遠き道は今の私にも繋がっているわけです。百年、二百年待たんと分かんのかと言ったら、私はどうするんですか。死んじやいますよ。この私が生きていく間にはつきりさせたい。この生きていく私において成り立たない救いだしたら要らないですよ。明瞭な形で真宗の学びの道程、それこそ法蔵願心と

いわれるものを燃え上がらせていくような学びの道程がきつとあるはずだと。それが『教行信証』信巻の三心一心問答。つまり『観経』の三心と『大経』の三心、この二つに注目して明らかにしていくんだということをお話しておるわけでありませう。ですから、三日目の貝沼先生がですね、今回から三心一心問答を学び、魂の冒険に出かけようということが始まるのは非常に楽しみでございます。

二

前回、私は三心一心問答、真宗の学びの道程のまず第一に「一者至誠心」という、『観無量寿経』のこのお言葉を取り上げてお話をさせていただきました。いま申し上げたことで申し上げれば、真宗の学びの道程のまず入口に「一者至誠心」というお言葉があるんだということをお話申し上げたわけでありませう。去年は時間を超過しましたけれども、まだ言い足りないこと、あるいはもつとご一緒に考えたいなあと思つたことが二点ほど出てまいりましたので、その二点をまず最初にお話しさせていたゞいて、最後に藤元正樹先生という先生について念じながら

お話しさせていたゞいて、今回一時間のお役目をつとめたいと思つております。

まず一つ目なんですけれども、先ほど申し上げました『観無量寿経』の「一者至誠心」という経言は、釈尊のお言葉なんです。つまり申し上げたいのは、まず第一に私たちが向き合わなければいけないのは、いったい釈尊とはどういう方なのか、この私にとつて釈尊とはどういう存在なのかということがですね、向き合わなければいけない真宗の学びの道程の入口にあるんだということをお話は申し上げたわけでございます。

もうちょっと言いますと、まず阿弥陀さんとはどういう方なのかという問いではないわけです。釈尊と一対一に真向かいになることが「一者至誠心。二者深心。三者回向発願心」という経言なんだということでありませう。阿弥陀さんではないわけですね。阿弥陀さんと一対一になつたら目がつぶれますよ。太陽をずっと見ていたらですね、目はつぶれます。

もうちょっと具体的なお話を申し上げます。先月、私は西本願寺の御正忌にお参りさせていただきます。そこで午前中お参りしたら、十時半から無料で三十分、お西のお坊さんが境内を案内

してくれるツアーがたまたま始まってですね、おっと思つて、申込不要だったのでそこに参加させていただきました。そしてお話を聞かせていただきました。その後、総会所でお西の方が節談説法をされて、その説法も聞かせていただきました。で、そのお二人の僧侶の話に共通していたのは、阿弥陀さんについてだったんですね。ずっと阿弥陀さんについてでした。もつと言いますと、阿弥陀さんのお慈悲についてのお話でした。

例えば、「我々は赤子のように阿弥陀さんに抱かれているんだ」とか、あるいは「阿弥陀さんは決して見捨てないんだ」というようなお話でございました。まず入口に阿弥陀さんと一対一、阿弥陀さんに向き合うということを、何か勧めてくださっているのかなあと私は感じました。ですが、それは果たして成り立つのかなあということを私は思います。

ちよつと話はズレますけれども、初期真宗教団、関東における初期真宗教団のことを念じますと、おそらく阿弥陀仏像は安置されていなかったんですね。と言いますのも、親鸞聖人が亡くなって十年後に京都に親鸞聖人のお墓ができて、廟堂が建てられるんですけれども、その後に覚如上人という方が阿弥陀

仏像を安置しようとしたんですね。そしたら、関東の親鸞聖人の直弟子のご門弟、高田の顕智さんらが激しく抵抗、拒絶したんですね。そういうお手紙が残されているというふうに聞いております。真宗の宗風には阿弥陀仏像を安置するというのはいないんだと。やめると。そうなんですけれども、ちよつと時代、時が進んで、関東より京都の方が政治力が強まってですね、このように本願寺派、ならびに真宗ではご本尊として阿弥陀仏像を安置していくという流れになっております。

では、当時関東で、初期真宗教団では何が安置されていたのか。おそらく私は聖徳太子像だと思いません。なぜそういうことが言えるかというと、現在でも聖徳太子の残されている絵像やお木像は真正面を向いておるんですね。真向きの聖徳太子です。真向きということはご本尊でありましょう。聖徳太子像に向かつて、皆さん合掌し念仏もうしておられたんだろうなあということを思うわけです。今は聖徳太子さん、名古屋別院の本堂に行けば分かりますけれども、斜め向いちゃってますね。聖徳太子と真向かいで合掌するということは、いったいどういふことなんでしょうかね。ちよつと考えさせていただきました

いなあと思っております。

その真宗の学びの道程ということでお話ししておるんですけども、道程ということで言えば、親鸞聖人の行実に学べば、親鸞聖人は観音菩薩様のお導きによって勢至菩薩に出あつていかれた。吉水入室ということ、観音菩薩に出あつて導かれて勢至菩薩に出あつていかれた方なんです。

これは、今日九州から来ていただいております方がおられますけれども、私は寺に生まれ育つたものではないんですけども、僧籍を置かせてもらつた三重県の住職さんが藤代聡磨先生に直接出あつて、そして「よきひと」と仰がれている方なんです。よきひとですね。私まったく真宗を知らない時に、「本願に生きた念仏者シリーズ」という東本願寺から出ている法話CDの中の藤代聡磨先生のCDを渡されてですね、とにかくいいから君は百回でも千回でもこれを聞けと、まずこれを聞けと言われてですね、それで本当にもうバカ正直に聞いていました。その法話の中で、藤代先生ははっきりとおっしゃっています。「なぜ人間に生まれてきたのか。なぜ人間に生まれてきたのか。それは観音と勢至に出会うためなんだ」と。「犬や猫やミミズでは観音菩薩と

勢至菩薩には出遇えないんだ。だから人間に生まれることは尊いんだ」というようなことをおっしゃっていたと記憶しております。

私がいま申し上げたいのは、阿弥陀さんに直接するということはできないということです。要らんことですけど、本当に西本願寺じゃなくてよかつたなあと思うんですね、私自身は。もつと迷いを深めていたのかなあと思っております。今のは要らんことです。

いま申し上げたような「一者至誠心」という経言で、善導大師もまず第一に挙げられるんですけども、その「一者至誠心」、まず至誠心を起こせと、誠を徹底せよと、真実たれということで、言葉投げかけた釈尊と一対一に真向きになった善導がおられるわけです。その道程を前回お話しさせていただいたということがあつたわけであります。

### 三

二点目なんですけれども、では「一者至誠心」と真向かいになっていくその道程の中で明らかに申していくこととしてですね、結論的なことを先に申し

上げますと、真俗二諦論、これは藤元（正樹）先生から教えられていることなんですけれども、「一者至誠心」の範疇の中でのこととして、実践概念として真俗二諦論ということが問題化されていくということでございます。

この真俗二諦論というのはですね、色んな捉え方があります、ちよつと今日は時間がないのでそこまでは申し上げられないんですけども、今日はとりあえず真諦というのは仏法、俗諦というのは世法ということでおさえたいと思います。仏法というのはダルマ、真理のことですね。私たちにおいては本願でございます。これは普遍的なものであると。普遍的なものということであれば、いつでもどこでも誰にでも成り立つものであります。そして世法。世法というのは社会規範とか、道徳観念とおさえたいと思います。これは特殊なものでございます。特殊なものであるから、ある時代ある社会で通用するものです。限定的なものなんです。

これが「一者至誠心」という経言を受けて、身口意三業かけて教えの如く誠を徹底する、真実たらんとする、真理への情熱を燃やす、その過程で、その燃やした火が私の方にも引火するんですね。この身

に火が着いちゃうわけです。熱いわけです。どうなるかというと、これは昨年申し上げたんですけれども、情熱を阻害するものがですね、他ならぬ自己の俗諦、執心といましようか、社会規範や道徳観念に対する執心というものがその阻害するものとして立ち現れてくる。つまり俗諦ということでは、それは仮のものなんです。その時代その社会を乗り切るためのその場しのぎのはずのものが、手放せないんだという問題が発生するわけです。あるいは、俗諦によって真諦を孤立させてしまうという問題が起こってくる。あるいは、真諦への固執を深めることによつていよいよ孤立していく。

これは難しいことではございません。例えば、私は分かっているはずなんですけど、こういうところは話が通じるけども、いざ家に帰って家族と話すとそれが通用しない。私は分かっている、みんなは分かつたらん。どんどん孤立していく。でも真理への情熱は燃やしている。どんどん狭く暗いところへ自分を押し込めていく。自分で自己をそういう場所へ追いやっていくようなことが発生していくわけですね。

先ほど申し上げたことでは、それは真宗を学

ぶ道程の中に必然すること。先ほどの宮田先生のお言葉で言えば、道を求めた者に必然する問題なんだと。必ずそういう暗くて狭いところをくぐらなければいけないんだと。いけないんだというか、そういうことが発生するというのを私は今日申し上げたいと思っております。

つまり真俗二諦論とかいつてますけれども、これは実践概念。明日の澤さんの講題ですけれども、心の行者における実践概念、誠を尽くすことを実行せよ、徹底せよという経言に、教命に向き合った者に必然する問題なんです。

今日ですね、普遍的なもの、仏法といわず普遍的な価値観、宗教的真理、そんなものは特定のある集団の利害、利益に繋がるからそういうものをいっているだけであって、そういうものはまがいものなんだ、嘘なんだということが、平気でそういう言説がまかり通っているような気がします。具体的に言えば、仏教教団、坊さんが仏法は大事だとか、なんまんだぶつとか言っているのは、仏法がそういう坊さんたちの集団の利益になるからそういうことを言っているだけなんだろうという言説があります。そういう言葉も私の中から出てくる。私自身の声として

聞こえてくる。ですがですね、そういういま申し上げた「一者至誠心」の経言に一对一で向き合っている者にとつては、そんな傍観的なしらけた言葉は問題にならないわけです。つまり「一者至誠心」という経言に向き合うということは、道を求める、求道するということは、私の言葉で言い換えれば、人生の傍観者ではいられなくなつた存在です。そしてかつ仏教徒として自分の人生を生きんと決断したものとつて、経言が積尊の教命として意味を持つてくるのであって、そこでは先ほど申し上げた言葉は問題になってこないはずなんです。けれども、そういう声も聞こえてくるようになります。私自身の声として。そういうことがあります。そこを徹底することによって、前回は転換が起こるんだということを申し上げました。蓬茨祖運先生や正親含英先生のお言葉を通して、そのことを明らかにさせていただきました。

前回どういう言葉で私は表現したのかなあと思つて、昨年の講義録を確認したらですね、その転換について、こういう二つのお言葉でした。一つは「執心を転じて自覚となる時」、あるいは「本願のまことがこの胸にうつる」という表現を、そういうお言

葉を紹介させていただきました。こういう言葉で私自身何を申し上げたかったのかなあと念じた時にです。ね、つまり仏法が先にあつて、教えが先にあつて、その教えを聞く私が後にあると思つていたものだから、必死に教えを聞くわけです。必死に教えの通り実行するわけです。そのようにするんだけど、そうじゃなくて、この生きている私が先にあるんだと。つまり順序が逆転するというのを申し上げたかったんだなあということを感じました。

仏法が先にあつて、生きている私が後にあるんじゃないやなくて、この生きている私が先にあつて、それに応じて仏法が開かれていくんだという。生きていることが先なんだ、それが「一者至誠心」ということから導き出されてくることなのかなあと私はいただいております。

まだここはですね、私も学ばせていただいている途中なんですけれども、つまりそういうことから二つ目の「二者深心」、二つに深心と。『観無量寿経』で説かれている「二者深心」で、善導大師は「一には」「二には」とおっしゃいますけれども、宗門の言葉で言えば、第一に機の深信、第二は法の深信と呼ばれています。法が先ではなくて第一に機が挙げ

られているということに繋がっていくのかなあといただきます。

#### 四

生きていることが先なんだということはどういうことかという、もう少し申し上げれば、私が生きているということ、常に社会的存在として生きているんですね。つまりある時代、ある社会という限定を持った特殊な存在として生きているんですね。つまり今日申し上げたいのは、宗教問題と社会問題は別ではないということが「一者至誠心」の範疇のこととしていえてくるということ、申し上げたいわけです。むしろ社会問題が宗教的課題となつていく。私たちを取り巻く、いや私が生きているその社会問題が宗教的課題になつていく、仏法を開いていく縁となつていくということ、申し上げたいわけです。

これは以前、宮城巖先生という方の本を読ませていただいた時にですね、こういうことを言われていました。「最近、おまえは信心派なのか、それとも社会派なのかどっちだということがいわれておりま

す」ということを宮城先生はご法話でされてきました。どうでしょうか、今現在の私たちの言葉で捉え直すならば、例えばですよ、あなたは時間とお金があつたら聞法会に足を運ぶんですか、それとも時間とお金があつたら被災地の復興支援をするんですか、どっちですか。こういう問いかけになるんですかね。

先ほど申しましたことから言えば、この問い自体が間違っているんですね。繰り返しますけれども、生きてあるということは特殊なものとしてある時代、ある社会の限定を生きているんですね、あえて申し上げますけれども、例えば、先ほど言った、真夏の時代が過ぎたという時が私が生きている時代なんだといただいておりますし、あるいはいま私が生きているということは、私の話で申し上げれば、日本人として日本社会でこの国で生きているわけです。この日本社会が抱えている問題、例えば少子高齢化の問題です。

これ皆さん、私も教えられて確かにそうだなと思つたんですけれども、少子高齢化というのは人類の有史以来の大問題なんですね。と申し上げますのは、有史以来人類の、日本に限つたことじゃなくて、このような大規模な形で長期間にわたつて、皆さんも

ご覧になつたことがあると思ひますけど、世代別の人数を示すグラフを見ると逆ピラミッド型になつていて、こんな状態は初めてのことなんです、人類始まつて以来。ですから、社会問題と言えば、貧困とか自然災害とか、あるいは原発の核汚染の問題だとか、色んなものがありますけれども、実は人類というのは全部経験しているんですね。初めてじゃないんですよ。ですから経験の蓄積があるわけです。

しかしこの少子高齢化社会の問題というのは初めてだから前例がないわけですよ。前例がないからどうしていいか分からないんです。バージンなんです、初体験なんです。ですから何をやっても上手くいかないんですよ。でもこの状態は、宮田先生のお歳の団塊ジュニア世代が亡くなるまで、少なくともあと四、五十年は続きます。逆にいえば、四、五十年経つたら終わる、一応人口バランスは極端な形は解消されると思うんですけれども、今はその真つ只中に私たちはいる。

えっ、これが仏法の話？と思われるかもしれませんが、私けれども、仏法の話以前に、この生きているこの私その問題のど真ん中で生きているんですね、そういう時代社会で。その私を救う仏法でなかったら

意味がないんですよ、この私においては。社会的存在として生きるこの私において、そういう社会問題が仏法を開いていく宗教的な課題になっていくんだということをやいま申し上げております。

何かいま問題と課題というのを交互に発言していただけますけれども、これは藤元正樹先生から教えていただいていることで、問題と課題というのは違うんだと。課題というのは課せられた問題のことをいうんだと。課せられたということでは、私自身の存在そのものに課せられている問題、それが課題というんだと。言葉を分けて申し上げなきゃいけないということをお教えされております。

いま「一者至誠心」ということで、昨年を引き続き、この二つを申し上げさせていただきました。またご一緒に考えたいなと思っておるわけでありまして、ですから今日を用意してきませんでしたけど、「一者至誠心」というのは終わらないんですね。「一者至誠心」が解決したから、次は「二者深心」だということにはならないわけです。先ほど藤元正樹先生の名前を出させていただきましたけれども、私においては藤元正樹先生というのは、その問題を生涯かけて、「一者至誠心」ということを徹底していかれ

た方だったなあということをお念じておるわけです。

## 五

昨年、藤元正樹先生の姫路の竜野のお寺に初めてお参りをさせていただきました。ご縁がありまして初めてお参りをさせていただいたんですけれども、書齋を拝見させていただいたりして、色んなことを感じさせていただきました。まだ言葉にはなりませんが、ぼんぼんぼんぼん体験が言葉になつたら、どうでもいいことは簡単に言葉にできますけれども、何か簡単には言葉にできないものを感じさせていたいて、また言葉にできたらなあということをお思います。

それもあつてですね、私にとって藤元正樹先生はどういう方だったのかなあということをお念じたわけなんですけれども、藤元正樹先生という方は私にとつては、一つ、姿勢を教えてもらいました。姿勢というのはどういう姿勢かというのと、これはもううまく言葉にはならないんですけれども、人間の持つ豊かさ、この生きていく私の豊かさ、世界の豊かさを否定したり、矮小化したりするものと怒りをも



なくなげきかなしむこと、しかるべからずとて、かれをはじしめ、いさむること、多分先達めきたるともがら、みなかくのごとし。この条、聖道の諸宗を行学する機のおもいならわしにて、浄土真宗の機教をしらざるものなり。まず凡夫は、ことにおいて、つたなく、おろかなり。その奸詐なる性の実なるをうずみて賢善なるよしをもてなすは、みな不実虚仮なり。たとい未来の生処を弥陀の報土とおもいさだめ、ともに浄土の再会をうたがいなしと期すとも、おくれさきだつ一旦のかなしみ、まどえる凡夫として、なんぞこれなからん。なかんづくに、曠劫流轉の世々生々の芳契、今生をもつて輪轉の結句とし、愛執愛着のかりのやど、この人界の火宅、出離の旧里たるべきあいだ、依正二報ともに、いかでかなごりおしからざらん。これをおもわずんば、凡衆の撰にあらざるべし。けなりげならんこそ、あやまつて自力聖道の機たるか。いまの浄土他力の機にあらざるかとも、うたがいつべけれ。おろかにつたなげにして、なげきかなしまんこと、他力往生の機に相応たるべし。うちまかせての凡夫のありさまにかわりめある

べからず。往生の一大事をば、如来にまかせてまつり、今生の身のふるまい、心のむけよう、口にいうこと、貪・瞋・痴の三毒を根として、殺生等の十悪、穢身のあらんほどは、たちがたく、伏しがたきによりて、これをはなるること、あるべからざれば、なかなかおろかにつたなげなる煩惱成就の凡夫にて、ただありに、かざるところなきすがたにてはんべらんこそ、浄土真宗の本願の正機たるべけれど、まさしくおおせありき。

されば、つねのひとは、妻子眷属の愛執ふかきをば、臨終のきわにはちかつげじ、みせじと、ひきさくるならいなり。それというは、着想にひかれて、悪道に墮せしめざらんがためなり。この条、自力聖道のつねのこころなり。他力真宗には、この義あるべからず。そのゆえは、いかに境界を絶離すというとも、たもつところの他力の仏法なくは、なにをもつてか、生死を出離せん。たとい妄愛の迷心深重なりというとも、もとよりかかる機をむねと撰持せんといでたちて、これがためにもうけられたる本願なるによりて、至極大罪の五逆謗法等の無間の業因を、

おもしろしとしましませざれば、まして愛別離苦にたえざる悲嘆にさえらるべからず。浄土往生の信心成就したらんにつけても、このたびが輪回生死のはてなれば、なげきもかなしみも、もつともふかかるべきについて、あとまくらにならびいて、悲歎嗚咽し、ひだりみぎに群集して、恋慕涕泣すとも、さらにそれによるべからず。さなからんこそ、凡夫げもなく、殆ど他力往生の機には不相応なるかやともきらわれつべけれ。されば、みたからん境界をも、はばかりからず、なげきかなしまんをも、いさむべからずと云々

（『真宗聖典』第二版 817頁）

はい、ありがとうございます。何か葬儀を終わってですね、このお聖教を拝読させていただいて、初めて涙が出てきたということがあったわけです。何か美しい話という話ではなくて、先ほど申し上げた言葉で言えば、教えを先にして生きていることを後にする。教えを自己に当てはめようとする「聖道の諸宗を行学する機」ということですね。そしてそれを勧める「多分先達めきたるもがら」の姿勢。そういうものに対する怒りなのかなあとと思わせられるものだと思います。

先ほども申し上げました、それはその言葉こそが、まさに私たちが生きてあることの豊かさ、もつと飛躍して申し上げれば、五濁の世の豊かさ、煩惱成就の凡夫の豊かさ、三千大千世界に満てる機の豊かさですね。宗教的課題が充ち満ちているんだと。そういう世界の豊かさを否定する、理知分別によって切り刻んでいく、そのことに対する怒りを、ここでは表現されているのかなあと、私自身は祖父の葬儀を通して思わされましたし、やはり去年に引き続いて今年も「一者至誠心」ということについて申し上げますにはいられないなあと思っていますね、いま申し上げておるわけでございます。

残り十五分ございますけれども、以上でございます。ありがとうございます。

### 【質疑応答】

A

質問じゃないんですけど、僕もその社会問題と仏法の問題、社会性が乏しいというのが、何かいつでも教えが先にあるからというところ、話を聞いてみると、やっぱりその難しいところをどう表現するか

ということだ、いぶ苦勞されている感じがしました。仏法と世法という。これすごく難しいですね。僕も宗派の要員研といって、解放推進本部の講座も受講しましたけど、やっぱり大谷派の中には曾我先生の『異なることを嘆く』を「さすが」という人が多いわけですね、特に門下の薫陶を受けた人は。それは僕には分からないことなんですけれども、やっぱり社会性ということを考えて、何かこれはいかがなものかなと思ってしまうんですね。機の深信が欠けるとかというけど、欠けんかったら差別せんのかという話なんです。解放同盟と大谷派における糾弾会とかを見てると、やっぱりみんな、訓覇（信雄）先生とかも、教えの言葉を先に持ってくるんですよ。そうすると、糾弾している側が「それじゃあそれをやりなさいよ」というわけですよ。ただ何か僕も真俗二諦が気になつて、やっぱり何か社会性というよなもの、僕も僧侶ですけども、自分自身もやっぱり生活していて乏しいとか、何か乏しくなつてくる。仏法が先にあるから、何か変に仏法に守られている。結局何か失敗しても、社会的に縁もないことなのに、何か慚愧に堪えませんか、そういう言葉で済ませてしまふとか。だから僕はちよつと

難しいところで話してくれたなと思いました。

あと、私もお寺の生まれじゃないんですが、七年前ぐらいにお寺入って、葬儀の席かな、住職の諷經でいく齎役みたいなものですね、その時に、ある子どもが二歳か三歳ぐらいかなあ、泣いてたんです、ワンワンワンワン。僕はえらい気になって、普通に泣いている感じじゃないんですよ。たぶん小さすぎて、今の話で言えば教えを先にすることもできないし、知識もないし経験もないから、たぶんそのおじいちゃんかおばあちゃんの死をまともに体全体に食らってしまったって、何かどうしていいか分からなくて泣いてたんですかね。僕なんかでもそうですけど、大人になると、もちろん泣く人はいるけど、まともにこれはつてことはないですよ。教えとか、そういう大人の階段をどんどん上がっていつて、積みたてられたもので、例えば僕は男なんで男らしくみえないとかね。これつて別に仏法だけじゃなくてもそういうのつて多々あるなあつて思つて聞いてました。だから僕はどつちかつていうと、やっぱり経験とか知識で返さずに、やっぱり何か動揺したり、そうやってまともに食らつた方が何か人間っぽいっていか、感情がある生き物なんです。河合隼雄つていう

人が『子どもの宇宙』という、黄色い岩波新書で売ってたんですけど、やっぱり死とかそういうものはまともに触られた方がいいという、何か動揺したり狼狽した方がいいみたいなのが書いてあって、何かそれを思い出しました。すみません、以上です。

**角田**

ありがとうございます。いま聞かせていただいて思ったことは、「甘える」ということなんです。

先回、時間が超過していることは分かっていたんですけども、三十分以上延長させていただいて、話をさせていただいた自分がおつてですね、その体験をなんでかなあと思った時に、やっぱりそういう座、場ですね。場に甘えさせてもらったんだなあ。甘えなくなつたから延長したんだなあというのがあります。色んなところでご話話も勤めさせていたくださいますけれども、そんな延長しないんですね、やっぱり。何でかといったら甘えていないというか格好つけているというか、ちゃんとしなきゃと思うわけです。申し上げたいのは、甘えられる場所がある、甘えられる座があるということです。いくつになつても、甘えさせてもらえる座があることの尊さが逆にあるんじゃないかなあと。もっと甘えたいなあ、

甘えればよかつたなあ、今日ももっといっぱい用意してこればよかつたなあ。そう聞かせていただきました、ありがとうございます。

**B**

何の疑いもなくですね、初期の関東教団とかでは名号本尊だと思っていました。純粹にもう単純に思いついでおつたんですね。聖徳太子が本尊だったという事に非常にびっくりしたんですけども、先生がそこに辿り着いた過程と言いましうか、そういうことがあればお話ししていただけますでしょうか。

**角田**

私が学ばせていただいている範囲内であれば、名号本尊というのは、ある意味、親鸞聖人も試作的なものとしてつくられていたのかなあということを思っております。一般的に、全体の真宗教団にゆきわたっているものではなかつたというのが、私が学ばせていただいているところです。それはなんでかという、親鸞聖人の名号本尊も、もちろん直弟子たちにも書いて与えていますし、現在も何本か真筆が残っていますけれども、何か途中まで書いてですね、バランスが悪かつたりとかですね、最後だけ文字が

小さかったりとか、そういうものがあります。ああいうのは単純に書き慣れていないからですね。

だからいっぱい書いて与えて、それが広まったというよりも、何かそういう新しい本尊を生み出すとした試作的な段階だったのかなあと。それを受けて真正面から取り組んだのが蓮如上人という。

その親鸞聖人が成そうとした仕事を継承して、名号本尊というものを確立していったのかなあと思いますが、ですから、試作的な意味では光明本尊もですね、どうも三河の方に伝わっているものも踏まえると、やはり親鸞聖人がその製作に関わっているというところとがいえやすいですね。名号本尊にしる光明本尊にしる、何かこういうものをつくりたいというものがあつただけけれども、それは試作段階であつて、一般的に広まっていたものはおそらく聖徳太子のご本尊だったんだらうということ、私が学んでいる中ではいえることだと思えます。

C 学んできた中では、太子堂ですね、親鸞が関東教団で説法しておるといふことは、これは史実的にいえるんですけども、それが聖徳太子を本尊と断定するのは言い過ぎじゃないかと思う。というのが

僕の意見ですけどね。断定的にいうのはちよつと。太子堂で説法されておるといふことは事実だけれども、かといつてそれを聖徳太子が本尊であつたといふのは言い過ぎじゃないかと思えますね。以上です。

角田

ありがとうございます。言い過ぎというのはおっしゃる通りで、いま申し上げたのは仮説的だということも踏まえてなんですけれども、明らかに現時点で聖徳太子の絵像だつたりお木像が全国に多く現存しているんですね。そこから逆に類推して。まあでも本尊かどうかというのは、それは言い過ぎだといふのはおっしゃるとおりだと思います。

C

それに対して、名号本尊と光明本尊の違いということも明らかにしなければ、もつと問題だと思つた以上です。

角田

ありがとうございます。

C

名号本尊と光明本尊というのが並列的な関係でいわれることも、これは教学的にかなり問題なので。以上です。

これはもう少し遡ると、浄土宗においてどういう形で本尊を掲げておったのかということまで問題になってくると思います。そのままで簡単に聖徳太子を本尊としておるといふのは暴論ですよ。

角田

ありがとうございます。

D

聞き逃したかもしれませんが、「一者至誠心」が入口だということと、それから人間の豊かさということを否定する、もしくは矮小化することへの怒りをもった戦い、その繋がるころはあるのですか。

角田

もうちよつと言葉をください。

D

一者至誠心と人間の豊かさを否定することへの戦いということ、それは繋がるころなんですか。

角田

別のものとして、藤元先生から教えていただいたこととして申し上げたんですけれども、私はそこは繋がることだと思ってるんですけれども、じゃあどこでちゃんと繋がっているのかというと、分から

ないです。それでも繋がってないと、私の中では納得がいけないということがあります。それだけはお伝えさせていただきまます。

D

ありがとうございます。仮説を実証していただければと思います。

角田

真宗の学び方ということで、実は今日「体験を通して」ということを講題に出したのはですね、この私が体験したことを通して教えに向き合っていくという、それが真宗の学びの一つの道程、形なのかなあと思ってるわけでありまます。それは色んな先生方からも教えられていることなんですけれども、何かこういう聞法会、特にこの欲聞座とか雲集の会というの、何か頭でつかちな人たちの、目一杯勉強した人たちの集まりとも思われているかもしれないんですけども、真宗の学びというのは、ある意味そうなんですけれども、であるからこそ、そのことをしっかりと、体験を通しての学びを続ける責務があるのかなあということをお自身は思っております。

(二〇二四年二月一日 名古屋教務所議事堂)